

社寺参詣曼荼羅の世界

大宰府観世音寺絵図考

岩鼻通明

観世音寺の草創

古代律令国家における、東アジア世界との対外交渉の拠点として設けられた官街^{かんが}である大宰府の周辺には、いくつかの社寺も配置された。筑前国分寺や国分尼寺も大宰府の付近に建立されたが、とりわけ重要視されたのは「府の大寺」と称された観世音寺^{かんぜおんじ}であった。というのは、観世音寺は奈良時代の国家仏教のなかで重要な役割を有していたからである。国家仏教の体制下では、僧尼は受戒^{じゅかい}しなければ、正式の僧尼と認められなかったため、受戒の場としての戒壇院^{かいだんいん}は奈良の東大寺と下野国の薬師寺、そして観世音寺と日本全国に三ヶ所しか存在しなかったのである。

さて、観世音寺の創建は天智天皇の誓願によるという。『続日本紀』の和銅二年（七〇九）二月条の元明天皇の詔によれば、観世音寺は斉明天皇の追善のために、天智天皇によって建立を発願され

たとされる（注1）。天智天皇の母帝である斉明天皇は、百済復興の支援のため、六六一年に九州に下ったのであるが、同年七月に朝倉橘広庭宮（福岡県朝倉郡）で亡くなった。

しかし、田村圓澄氏によれば、観世音寺造営の実質的な発議者・推進者は持統天皇であったといふ（注2）。持統天皇は観世音寺の造営を藤原京・藤原宮、大宰府の建設と関連づけ、並行して進めたとされる。観世音寺の完成には長い歳月を要したが、ようやく天平十八年（七四六）に落慶法要が行なわれた。その間、天智天皇の家系につながる女帝たち、持統天皇、元明天皇、元正天皇によつて、観世音寺の造営は脈々と引き継がれたのであった。

絵図作成の契機

かつての観世音寺の伽藍配置は残存する礎石や

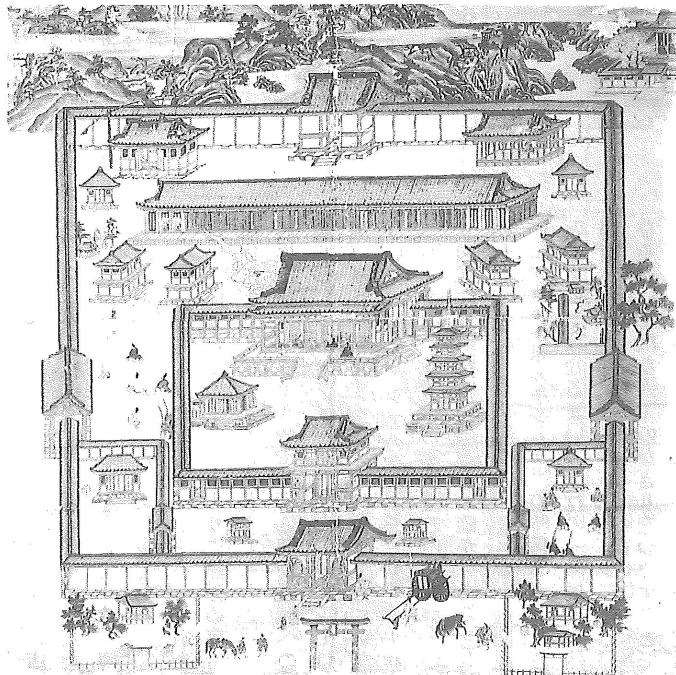
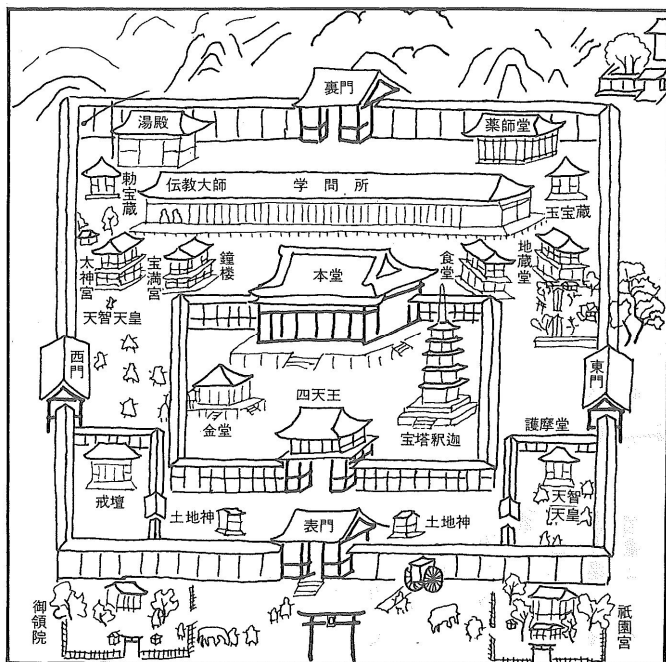
近年の発掘調査の成果によって明らかになってきているが、観世音寺絵図（写真1）に描かれた伽藍は、発掘成果や「延喜五年観世音寺資財帳」（『平安遺文』一九四号）とよく一致する。

高倉洋彰氏によれば、この絵図は従来、江戸時代の作と考えられていたが、近年、大永六年（一五二六）に古図を写し、承応三年（一六五四）に表装したことが明らかにされたという。では、なぜ室町後期に、この絵図が作成されたのであろうか。

平安末期、律令体制の崩壊にともない、観世音寺の莫大な経済力の掌握を目的として進出してきた東大寺の末寺と観世音寺は化したのであり、大宰府権力の低下とも相まって、中世に入つて観世音寺は衰退へと向かう（注4）。

文明十二年（一四八〇）に観世音寺を訪れた連歌師の宗祇も『筑紫道記』に「会過ぎぬれば観音寺に入りぬ。此の寺は天武天皇の御願なり。白鳳年中の草創なり。（中略）諸堂塔婆廻廊皆跡もなく。名のみぞ昔のかたみとは見え侍る。観音の御堂は今に廃せる事なし。さて阿弥陀仏のおはします堂。又戒壇院かたの如く有り」と記している（注5）。

中世の観世音寺は宗祇の描写ほどには荒廃していなかったとみる立場もあるが（注6）、いずれに



絵図に描かれた伽藍

せよ、大勢としては寺力が衰退に向かっていたことは事実であろう。そして、荒廃した堂舎を再興するための勧進の必要から、往古の伽藍図が模写されてこの観世音寺絵図が作成されるに至ったのではなからうか。

本絵図は、一九八八年秋に太宰府市の九州歴史資料館で行なわれた「発掘が語る遠の朝廷 大宰府」展に展示されていた。その際の観察をもとに、絵図の記載内容（トレース図参照）について若干の検討を加えたい。

絵図の内容については、鎌倉時代に新たに開かれた戒壇院の南門が描かれていない点を含めて伽藍配置が古期のものと一致し、逆に大治三年（一二八）までしか遡りえない鎮守日吉社が描かれる等、原図は平安時代末頃に完成した可能性があると高倉洋彰氏は指摘した（注7）。とすれば、観世音寺が東大寺の末寺となつたのは保安元年（一二〇）であるから、東大寺の末寺化に際して絵図の原図が作成された可能性もある。

また この観世音寺絵図は人物や牛車の表現が
東大寺曼荼羅（京都国立博物館）『古絵図特別展

覽会図録^註 一九六九年 所収) に近似しており、作成に当たった絵師の面からも東大寺との関連が注目される。

なお、仁平三年（一一五三）の「東大寺諸莊園文書目録」（『平定遺文』二七八三号）の観世音寺の項に、「禎養老絵図」という記載がみえる。

この絵図は現存していないが、前述のように養老年間はまだ観世音寺の造営途上であつたことからこの養老絵図は完成予想図的なプラン図であつた可能性が考えられる。

さて、観世音寺絵図の文字注記（トレース図参照）をみると、堂舎等の建造物に付された注記以外に、いくつかの人物図像にも注記が付されていることに気がつく。注記の付されている人物は伽藍の右下隅（写真₂）と左端中央部（写真₃）の「天智天皇」と、伽藍の上部に細長く描かれた学問所の建物の左端の「伝教大師」、それに表門の外に立つ「太宰小貳」の三人である。

このうち、天智天皇は、前述のように観世音寺建立の誓願者であり、したがって縁起的圖像として繰り返し描かれていると解釈できる。また、天智天皇は二ヶ所とも童子姿で描かれているが、この表現は、聖なる「童」、あるいは護法童子としての「童」を意味するものであるうか（注8）。表門

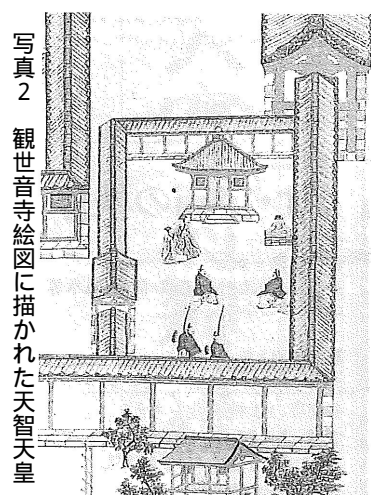


写真2 観世音寺絵図に描かれた天智天皇

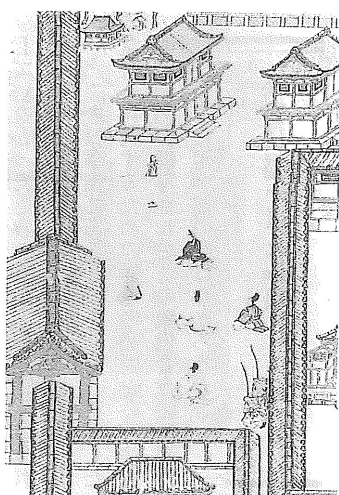


写真3 童子姿の天智天皇

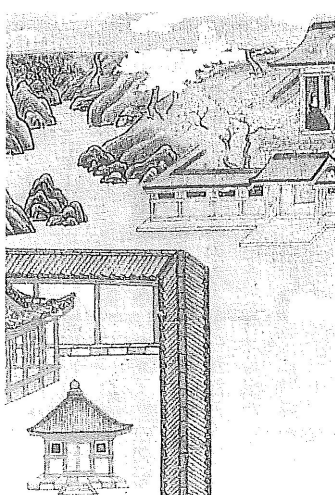


写真4 絵図右上端の建物

(写真1～4は『古寺巡礼 西国6観世音寺』淡交社刊より引用)

外の牛車にも「天智天皇御車」との注記が付され、現実にはありえなかったはずの天智天皇の参詣のありさまが描かれているということになる。

では、「伝教大師」の人物図像は何を意味するものであろうか。現在、観世音寺は比叡山延暦寺の末寺で天台宗に属しているが、鎮守として前述の日吉社が置かれていたこと等から、古来天台宗との関係があったことが指摘されている(注9)。したがって、天台宗の開祖である伝教大師最澄の来山伝承が観世音寺に伝えられており、この表現に至ったのではなからうか。いずれにせよ、この「伝教大師」の図像表現は、観世音寺と天台宗との密接な関係をつかがわせるものであることは確かである。

また、表門外の「太宰小貳」の人物図像も大宰府と観世音寺の結び付きを示唆するものであろう。さらに、絵図下端中央部の鳥居の扁額には「道風筆」との注記が付されている。平安中期の能書家であった小野道風は太宰大貳葛紘の子であり、その縁からして観世音寺の扁額に筆をふるったとしても不思議ではなからう。

なお、絵図の右上端に描かれている建物(写真4)について、高倉洋彰氏は斉明天皇の朝倉橋広庭宮を思わせる御殿風の建物との指摘をされている

(注10)。建物の右半分は描かれていないが、あるいは表装の際にカットされたようでもあつて十分明らかではないが、庭に満開の花(梅の木か)が描かれていることから、筆者としては大宰府に流された菅原道真邸ではないかと憶測する。

道真には有名な「都府楼はわずかに瓦の色を看る 観音寺はただ鐘の声を聴く」という詩もあり、方角的にも朝倉橋広庭宮は観世音寺から南東となるため、観世音寺の北東に位置する太宰府天満宮の道真の故地が描かれているとみるのが自然、であらう。

最後に、観世音寺の四至について述べると、前述の「観世音寺資財帳」のなかに、北を大野城南城外の遠賀門下道、東を大野川(御笠川)、南を五条大路ないしは大野川、西を学校院との境界である松岳と学校院東小路を結ぶ線とする記載がみえ、方三町の寺域を復原することができるとされる(注11)。

観世音寺絵図が、この方三町の寺域の表現を意図していたかどうかは、絵図の四周が若干カットされているようであるため、微妙な問題ではあるが、たとえば下端部の三つの鳥居はいずれも道路に面しているがごとき表現であり、南境の五条大路を絵図の下部に描いたのではないかと思われ、

また、上端部の山地表現を大野城とみれば、寺域の四至の表現を配慮していたと考えうる。

おわりに

以上、観世音寺絵図について概観を試みたが、ではこの絵図はどういった分類に属するのであるうか。寺域の四至の表現を主眼としているのであれば、社寺境内図あるいは社寺結界図に含めることができる。

一方、境内に登場する天智天皇や伝教大師等の伝承的図像に一注目すれば、縁起絵に属するものともとれよう。

さらに、伝承的な人物図像以外にも若干の参詣者が描かれていることからすれば、社寺参詣曼荼羅の一種とみることも可能であろう。

この絵図が写された室町後期の大永年間、まさに参詣曼荼羅の萌芽期であり、社寺境内図に参詣者の図像を描き加えたような観世音寺絵図や前述の東大寺曼荼羅のような作例が登場した時代であった。

おそらく、前述の「養老絵図」や、観世音寺絵図のもととなった古図は、社寺境内図的要素が強いものであったと想像される。その上に、時代の

流れに沿って、縁起的な人物図像や参詣者が描き加えられたとすれば、この観世音寺絵図を参詣曼荼羅の初期の作例に含めてもよいのではなからうか。

「社寺参詣曼荼羅」という用語が、作成当時の人々によって与えられた名称ではなく、一九六〇年代に研究者によって命名された学術用語である以上、厳密な概念規定を行なって対象を限定すべきであるとの主張ももつとはあるが、各地の社寺に伝来する絵図の比較検討を進めていくためには、広い視野から参詣曼荼羅を把握することが必要な時期ではなからうか。

(いわはなみちあき(人文地理学))

注

- (1) 田村圓澄 「観世音寺草創考」『日本歴史』四四〇、一九八五年。
- (2) 前掲注(1) 参照。
- (3) 江上栄子・石田琳彰 『古寺巡礼 西国6 観世音寺』淡交社、一九八一年。
- (4) 高倉洋彰 「筑紫観世音寺史考」『大宰府古文化論叢 下巻』古川弘文館、一九八三年。
- (5) 『日本紀行文集成 第四巻』日本図書センター、一九七九年。
- (6) 前掲注(4) 参照。
- (7) 前掲注(3) 参照。
- (8) 黒田日出男 『(絵巻)子どもの登場』河出書房新社、一九八九年。伊藤清郎「中世寺社にみる「童」」『中世寺院史の研究 下』法蔵館、一九八八年。
- (9) 前掲注(4) 参照。
- (10) 前掲注(3) 参照。
- (11) 前掲注(4) 参照。